幼児教育の独自性はどこにあるのか(4)

矢野　智司

生命のフレーベル　上

フリードリッヒ・フレーベルの名前は、保育理論や幼児教育の授業のなかで、幼稚園の創始者として、一度は耳にしたことがあるでしょう。しかし、その思想の中身となると、フレーベルの著作は、ロマン主義の難しい用語が続き、そう読みやすいものではありませんから、著作を読んだ人はそう多くはないでしょう。フレーベルの思想上の主著とされている『人間の教育』(荒井　武訳　一九六四年)は、いまでも岩波文庫で読むことができます。その冒頭の箇所を少し引いてみましょう。

……すべてのものの使命および職分は、そのものの本質、したがってそのもののなかにある神的なもの、ひいては神的なものそれ自体

を、発展させながら、表現すること、神を、外なるものにおいて、過ぎゆくものを通して、告げ、顕わすことである。認識する存在、理性をもつ存在としての人間の特殊な使命、特殊な職分は、人間の本質を、人間のなかにある神的なものを、したがって神を、さらに人間の使命や職分そのものを、充分に意識し、生き生きと認識し、明確に洞察すること、さらにそれを、自己の決定と自由とをもって、自己の生命のなかで、実現し、活動させ、顕現することである。

意識し、思惟し、認識する存在としての人間を刺戟し、指導して、その内的な法則を、その神的なものを、意識的に、また自己決定をもって、純粋かつ完全に表現させるようにすること、およびそのための方法や手段を提示すること、これが、人間の教育である。

抽象的で難解な表現のようですが、ここでいわれていることは、普段の保育や幼児教育が日々実現していることです。ここで「神的なもの」と呼ばれているのは、生き生きと自己創造する自然＝生命のことです。そのような自然＝生命は、植物や動物や人間といったさまざまの形を取って世界に表現されます。そのなかでただ人間だけが、この自然＝生命を発展させ表現するという使命を、認識することができます。ですから、人間はその内に生き続けている自然＝生命を、自覚的に発展させ表現することができるのです。人間の教育とは、子どものうちに働くこのような自然＝生命をより豊かに発展させ表現するよう手助けすることです。

このフレーベルの教育思想には、子どもの成長と人類の成長と生命の発展とを結びつけてとらえ

ようとする深い生命観があります。それはモンテッソーリやシュタイナーの教育思想とも共通しています。

このようなフレーベルの生命観は、彼の中心思想を表す「生の合一」という言葉に集約されています。この「生の合一」についての彼の説明は、なかなか煩雑でやっかいなのですが、「生の合一」とは、世界と自分との境界線が溶けてしまい、我を忘れて世界と一体となっているような体験を意味します。少し乱暴な整理をしますと、「生の合一」というのは、これまで何度も述べたきた「溶解体験」としてとらえることができると考えます。本連載の第一回で述べた遊びも「生の合一」の一つですし、第二回で述べた子どもが動物になることも「生の合一」の一つなのです。

フレーベルは、「生の合一」をもたらすために、さまざまな遊び方を工夫しました。またさまざまな遊具（メディア）を自分で考案したりもしました。みなさんのよく知っている積み木も、フレーベル考案の代表的な遊具の一つです。フレーベル考案の遊具は、日本では「恩物」と呼ばれています。普段聞き慣れない言葉ですがGabeというドイツ語の訳語で「贈り物」という意味です。これらはいまでもフレーベル館で手に入れることができます。フレーベルは遊具の使用法について、子どもの自由な使用を認めず、厳密な規則を決めていました。ですからフレーベルの恩物は、「遊具」という言葉で連想するものではなく、むしろ「教具」といったほうがよいかもしれません。

フレーベルの幼児教育のシステムは、母国のドイツでは政府によって禁止されましたが、英米を中心に世界中に広がりました。しかし、後に遊具の形式主義的な運用について、強い批判がなされるようになりました。日本では、この『幼児の教育』の編集者だった倉橋惣三が、フレーベル主義の形式主義的な教育を批判して、恩物をバラバラにして子どもの自由な遊びにゆだねたことは、みなさんも授業で聞かれたかもしれません。

なぜフレーベルは恩物の遊び方を細かく決めていたのでしょうか。それは子どもが恩物によって、自然＝生命の法則と類似したパターンの形状を作りだすことで、自然＝生命の法則を体験し、予感することができると考えたからです。たとえば第一遊具であるひもで吊された球を使った遊びでは、子どもはその球をつかんだりはなしたりすることで、合一と分離と再合一という世界の秩序・宇宙の生成の法則を予感するのだといいます。このように、それぞれの恩物の使用法において、恩物によって作りだす小さな世界と、それに対応する大きな宇宙との関係づけが、一つ一つ注意深くなされていました。

とても不思議な思想でしょう。どうしてフレーベルはこのように考えたのでしょうか。それはフレーベルの「象徴主義」という言葉で理解されてきました。このような思考法は宗教のようにみえるかもしれません。事実、宗教にはさまざまな象徴が使われており、大きな役割を果たしてきました。たとえば、古代より球体は完全な宇宙の象徴とみなされてきました。このような象徴という思考法は、科学的な思考法から見れば不合理極まりないものにみえるかもしれません。

科学が唯一の優れた思考法であるのなら、象徴という思考法への批判は正しいといえるかもしれ

ません。しかし、科学は世界を理解する方法として唯一の方法ではありませんし、もっとも優れた思考法でもありません。私たちが他者や自然とかかわるとき、科学は世界をコントロールすることでは役には立ちますが、それはかかわり方の一つをなすものでしかありません。私たちは、他者や自然と、かけがえのない友人として、あるいは聖なるものとして、出会うこともできるのです。私たちは自然＝生命の一部をなしていますから、全体としての自然＝生命とたえず一体となることを必要としています。フレーベルの思考法は、他者や自然＝生命との生きたつながりを作る思想として今なお優れています。

私たちは自然＝生命とどのようにかかわっていくのか、そのかかわり方を幼児のときにどのように培っていくのか、このように考えると、古びたようにみえるフレーベルの思想は俄然輝きをましてきます。フレーベルの思考には、自然＝生命を日々創造的進化を続ける生きたネットワークとしてとらえるエコロジカルな思考が宿っています。フレーベルの思考の特徴は、パターンとパターンとの間をつなぐ共通するパターンを見つけて、世界を類似したパターンでつないでいくことでした。そのためにフレーベルの文体にはメタファー（隠喩）が多く用いられ、重要な役目を果たすようになっています。

メタファーというのは、異なった事物や出来事の間に同じパターンを発見し、それによってこれまで見いだすことのなかった新しい関係を表現する文学上の技法です。たとえば、「人はオオカミだ」という文はメタファーです。このとき人とオオカミとの間に、野獣的な特性を見いだし、その共通するパターンを通して両者がつなぎ合わされるのです。このとき「人は暴力的だ」というより

人のなかにある暴力的な側面が、オオカミにまつわる残酷なイメージ群によって活性化され、生き生きとして伝わることになります。詩や物語は、このメタファーによってできています。

このメタファーの思考法は、保育園や幼稚園でもなじみの何かに似ていませんか。そうです。子どもの好きななぞなぞの思考法と同じなのです。中川李枝子さく・山脇百合子え『なぞなぞえほん1のまき』（福音館）から一つ。

おなかが　へると
しぼんで　しょんぼり
おなかが　ふくらむと
かるくなり
うきうき　うかれて　そらのたび

ここでは風船の空気が入ったり抜けたりする姿と、人が食事をしておなかがふくれたり減ったりする姿とが結びあわされています。風船はまるで生き物のようにとらえられています。このような表現は擬人法と呼ばれたりします。子どもはこのような思考法が大好きです。このような思考法が子どもの哲学を伸びやかに展開させていきます。大人が当たり前と思っている世界の区切り方を、子どもの哲学は軽々と越境していきます。生きているものと生きていないもの、植物と動物と人間、世界のさまざまな事物や出来事の境界線を横断し、メタファーの思考法は思いもつかなかった視点から、思いもつかなかったもの同士を結びあわせ新たな世界を作りだしていくのです。子どもの遊びが、このメタファーの思考法によって動かされているのはいうまでもありません。

〈次回に続く〉

（京都大学）